

二〇二六年 二月一日

入学試験問題

国語

I

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。解答は、解答用紙の

1

から

14

までにマークせよ。

^{注一}ブローデルは「ほとんど自力で、封建社会から貨幣秩序へ移行していった社会の例は、西欧社会と日本の社会において他がない」と記した。この文章の意味を吟味したい。

一八世紀以来の、市場経済からの資本主義の発展の違いがある。ほとんど自力で” という意味は、例えば、他の非西欧世界は植民地等によって西欧の支配を少なからず受けたが日本はそうではない、ということである。それと同時に、労働者における倫理観の違いが、今日の日本での「働き方」改革を考えるときに重要だ。日本では労働には^ア「キン勉」の倫理観、道徳的な意味づけが与えられた。経営者の側も利益追求と同時にそれが他者利益につながる方向に倫理観が形成された。しかし今や米国型の新自由主義の導入によってそれが失われた。

まずは西欧での労働の意味について根本的なことから始めたい。

^{注一}マンデヴィルの逆説的な表現、「私悪すなわち公益なり」の真意を理解するためには、西洋キリスト教文明における^{注三}プラトン主義の影響を理解する必要がある。つまり、すでに紀元五世紀の^{注四}アウグスチヌスに出ているプラトン主義的な二元論である。キリスト教の愛の概念に当てはめると「神の愛」と「自己愛」の対比ということになる。

西欧キリスト教の初期に多大な影響を与えたアウグスチヌスの『神の国』(四二一〜四二七年)、これは^イソウ大な世界観をもった歴史哲学である。ただ聖書のイエスの説いた「神の国」を主題にはしていない。それでもその後、歴史の中で教会がたどった歩みを顧みるときに大いに参考になる。『神の国』には「神の国」対「地上の国」という二元論に陥りやすい誤解を与える面があった。確かにアウグスチヌスにはネオ・プラトニズムの影響が強い。

アウグスチヌスの『神の国』が西洋思想の二元論の^{えんげん}淵源ともなってしまった理由は、Civitas Dei, Civitas Terra (神の都市、地上の都市)の対比がかなり強調されたからだ。一口で言えば、アダムとエバの原罪による罪の支配、その子カインと

セトのそれぞれの子孫たちの歴史、神を崇めるものたちの国と神を否定する者たちの国の対比、というジョ述である。この古典的名著は、高度に科学技術の発達した社会にもう一度読み直しを迫られざるをえない。アウグスチヌスの「神の国」の概略は以下のようである。

全二二巻からなる『神の国』、その第八巻以前は異教宗教への反駁^{はなげ}、第八巻以降は哲学諸説への言及となる。特にプラトンへの評価がきわめて高い。例えば第八巻第五章「それゆえ、プラトンが、知者とはそのかたにあずかることによって至福となるところの神にしろい、そうした神を承認し、そうした神を愛する人のことである、と言っているとするれば、なぜわたしたちは他の哲学者たちを吟味する必要があるのか。プラトン派の人々以上にわたしたちに近いものはないのである」。

神の国と地上の国の淵源と発展をつづり、地上の国は天使の墮落から始まるとする（第一一巻）。そして歴史は人間の父祖アダムの原罪から始まる（第一三巻）。特にプロテスタントに関心のある箇所、意思の自由、予定論については救いの予定であって地獄への予定はない、と語る（一四巻）。一四巻の末尾一八章は大そう重要な箇所なので一部を引用しておこう。

それゆえ、二つの愛が二つの国を造ったのである。すなわち、神を軽蔑するに至る自己愛が地的な国を造り、他方、自分を軽蔑するに至る神への愛が天的な国を造ったのである。要するに、前者は自分を誇り、後者は主を誇る。なぜなら、前者は人間からの栄光を求めるが、後者にとっては、神が良心の証人であり最大の栄光だからである。前者は自己の栄光としてそのこうべを高くし、後者は、神に向かって「わたしの栄光よ、わたしのこうべを高くするかたよ」と言う。前者においてはその君主たちにせよ、それに服従する諸国民にせよ、支配欲によって支配されるが、後者においては人々は互いに愛において仕え、統治者は命令を下し、^エ統治者はそれを守る。前者は自分の権能の中にある自分の力を愛するが、後者はその神に向かって「わが力なる主よ、わたしはあなたを愛そうとする」と言う。

一言で言えばアウグスチヌスにおいては「神の愛」と「自己愛」^Aの反定立が強すぎるといふことだ。「神の愛」の自己犠牲の概念すなわち利他主義はあまりに純粹であって、たとえそれに感動してキリスト教に入信しても、俗人である自分がいざ実行しようとするとはハードルが高すぎる。こう多くの人が感じて当然かもしれない。家族がいなくて、または結婚しないで単身者としての身軽さがあれば修道院にこもり、祈りと奉仕の日々に生きることににより、「神の愛」を実感できるかもしれない。カトリック教会の二〇〇〇年続いている強みはここにある。自己を捨てた「神の愛」へのケン身^オのように見える。

カ

この禁欲がまた、時として男性修道者の性的醜聞として大きなニュースにもなってしまう。いまだにそうだ。

プロテスタントはこの偽善性を避けるためにも、特別の「召命」以外は在家を基本にした（日本仏教で親鸞^{注五}がそれまでの僧侶の戒律を破って結婚したことと似ている）。しかしいったん結婚して家族への責任を感じたら、他人に優先してでも、ある程度、身内や家族を守る家族愛の行動をとらざるをえない。これを自己保存いや自己のDNAの保存のための行動、すなわち自己愛だと言われればその通りだろう。

B

西欧においても、人間は純粹に無私の神の愛を実践することはできない、こう思っても無理からぬところがある。こういった純粹にアウグスチヌスの「神の愛」、これへの反動が起こった。これが自己愛を肯定する、やや極端なまでに自己愛を肯定するマンデヴィルのような逆説（この意味でラヴァル^{注六}がマンデヴィルをプロテスタント的（すなわち抗議する人）と表現しているのは正しい）となったのはうなずけないわけではない。やがて世界進出を伴う一七一一八世紀のヨーロッパの激動の政治や経済、そして科学や哲学の変化の中で、経済合理性や効用の名の下に「欲望の解放」すなわち功利主義の哲学となり、「経済人間」の成立となっていた。これはアウグスチヌスの禁欲観からすれば確かに驚くべき逆説ではある。

近代の「経済人間」の概念は資本主義イデオロギーを支え、この方向は地球資源の無限性の概念があるうちはきわめて有効に機能した。そして現実人類を全体として豊かにした。これを否定することはできないだろう。そしてその到達点として、原子エネルギーの解放をもたらした。これは国家的な科学のプロジェクトとして、大量の資本投下の下に技術的に可能

になったからである。

キ 人類は原発をも手にした。すなわち原発というエネルギー生産方法は「人類が自分の手で無限のエネルギーを生み出せる」という夢物語的な楽観論を人々に与えた。ところが、今はこれがあらゆる意味で不可能であることを人類は知った。すなわち地球資源は無限でなく有限である。また放射能を閉じ込める処方箋はほとんどなきに等しい。

ク アウグスチヌスの「神の愛」と「自己愛」の強い二元論ではなく、より身体性を備えた実在論 (realism) として、生身の人間論を展開しなおす必要がある。西洋哲学では、プラトン主義に由来する二元論の克服という課題である。(仏教哲学における身体論の回復も同様である)。

人間性は強靱きょうじんではなく弱いものである、そのことをまずは認める。地球も無限ではなく有限であることをまずは認める。ここに登場する人間論と社会論は「経済人間」に対抗する「倫理人間」である。「経済人間」をある領域に限定するために、また「倫理人間」の新たな理解のためにも、アウグスチヌスの描く反定立の強い「あれか、これか」の人間像とは異なり、人間は強くもあり弱くもある現実を承認することから出発したい。

(稲垣 久和 『働くこと』の哲学』一部変更)

注一 フェルナン・ブローデル・・・(一九〇二～一九八五) フランスの歴史家で、代表作に『地中海』がある。

注二 バーナード・マンデヴィル・・・(一六七〇～一七三三) オランダ出身の思想家で、代表作に『蜂の寓話』くちわがある。

注三 プラトン・・・(紀元前四二七～三四〇) ソクラテスの弟子でアテネの代表的な哲学者。

注四 アウグスチヌス・・・(三五四～四三〇) 北アフリカ出身の司教でキリスト教思想の基礎を築いた。

注五 親鸞しんらん・・・(一二七三～一二六三) 日本の浄土真宗の宗祖で「悪人正機」や「他力本願」を説いた。

注六 クリスチャン・ラヴァル・・・(一九五三～) 『経済人間』を著したフランスの社会学者。

問一 傍線部アからオまでのカタカナ部分と同一の漢字を用いる熟語をそれぞれの選択肢の中から一つ選び、その記号を解

答欄 1 から 5 までにマークせよ。

1	ア キン勉	① キン労	② キン視	③ キン等	④ 課キン
2	イ ソウ大	① ソウ似	② ソウ飾	③ ソウ麗	④ ソウ括
3	ウ ジョ述	① 削ジョ	② ジョ成	③ 順ジョ	④ 平ジョ
4	エ ヒ統治者	① ヒ常識	② ヒ験者	③ 総ヒ用	④ ヒ較級
5	オ ケン身	① 貢ケン	② 派ケン	③ ケン究	④ ケン設

問二 空欄 カ キ ク に入る語句の組み合わせとして最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選

び、その記号を解答欄 6 にマークせよ。

6	① カ しかし	キ ところが	ク 一方で
	② カ したがって	キ そして	ク だから
	③ カ ところが	キ こうして	ク したがって
	④ カ 一方で	キ したがって	ク けれども

問三 傍線部Aに『神の愛』と『自己愛』の反定立が強すぎる」とあるが、それはどうということか。その説明として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄 7 にマークせよ。

- 7
- ① 「神の愛」と「自己愛」をはっきり分けすぎて、人間の現実的で中間的な営みを理解しにくくしている。
 - ② 「神の愛」と「自己愛」を細かく定義しすぎたため、反対意見を持つ人が多数派となってしまうている。
 - ③ 「神の愛」と「自己愛」をはっきり分けすぎて、人が宗教を信仰することに無理が生じてしまっている。
 - ④ 「神の愛」と「自己愛」を細かく定義しすぎたために、愛についての理解が困難になってしまっている。

問四 傍線部Bに「人間は純粹に無私の神の愛を実践することはできない、こう思っても無理からぬところがある」とあるが、それはどうということか。その説明として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄 8 にマークせよ。

- 8
- ① 人間には神のように超人的な能力が備わっているわけではないので、何かそれを補う見返りを求めてしまうということ
 - ② 神のようになることを目指したとしても、神の姿は人間の目に見えないため、模倣のしようがなく途方に暮れてしまうということ
 - ③ 信仰心が強く純粹に神を信じていても、生活がうまくいかないときには、神から愛されていないと感じるのも仕方がないということ
 - ④ どれだけ理想を目指していても、人間には弱さや限界があるために、完全な自己犠牲をはらって行動することはできないということ

問五 傍線部Cに「生身の人間論を展開しなおす必要がある」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切

なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄 9 にマークせよ。

9

- ① 人間が道具や文明を持たずとも、安心して生活できるような環境をつくる必要がある。
- ② 人間も本来的には野生動物と同様に余計な欲を捨て、自然に則して生きることが必要である。
- ③ 人間を両極面に分けるのではなく、人間存在そのものを全体的にとらえることが必要である。
- ④ 人間ではない何か超越的なものに頼らずに、人間そのものを強くしていくことが必要である。

問六 本文中の「倫理人間」と「経済人間」の対比を記述した文章として、最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選

び、その記号を解答欄 10 にマークせよ。

10

- ① 倫理人間は西欧型の二元論を超えた総合的な人間のこと、経済人間は二元論の揺れ動きの中で発生した合理的な人間のことである。
- ② 倫理人間は西欧型の二元論を超えた合理的な人間のこと、経済人間は二元論の揺れ動きの中で発生した総合的な人間のことである。
- ③ 倫理人間は二元論の揺れ動きの中で発生した合理的な人間のこと、経済人間は西欧型の二元論を超えた総合的な人間のことである。
- ④ 倫理人間は二元論の揺れ動きの中で発生した総合的な人間のこと、経済人間は西欧型の二元論を超えた合理的な人間のことである。

問七 筆者の主張について説明した次の文章を完成させるよう、各欄に入る最も適切な選択肢を一つずつ選び、その記号を

解答欄

11

から

14

にマークせよ。

西欧の労働観は「神の愛」と「自己愛」の二元論のなかで揺れ動いていたが、11 への反発により、12 に重点が移り、13 が登場した。この思想は資源が無限にあるという前提のもとに成り立っていたが、資源は有限であるため、人間を総合的にとらえる 14 という概念が必要となった。

- 14
- 13
- 12
- 11

- ① 経済人間
- ② 倫理人間
- ③ 偽善性
- ④ プラトン主義
- ⑤ 神の愛
- ⑥ 資本主義イデオロギー
- ⑦ 西洋哲学
- ⑧ 自己愛

II

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。解答は、解答用紙の

15

から

26

までにマークせよ。

倫理には、道徳とは違って、いつでもどこでも通用する「一般」はありません。この意味で、倫理は常に生成的です。「こうあるべきだ」という一般則としての道徳の価値を知りつつも、具体的な状況というライブ感のなかで行動指針を生み出し続けること。手の倫理は、接触を通して相手の体を生きさせることと密接な関係があります。

このように、相手との関係のなかで行動指針を生み出し続ける生成モードは、触覚的なコミュニケーションが暴力的にならないために不可欠な態度であるといえます。それは「ふれる」のあるべき姿です。

そのことを前提にしつつ、しかし、ときには「さわる」が有効な場面があります。医師が患者を触診するときの、感情的な湿度を排した「さわる」。そこにあるのは、医師としての専門的知識を前提にした、科学の対^A象として患者の身体を扱うための「距離」です。

ア、自分が持つ知識や技術を含め、あらゆる先入観を排除した「さわる」もあります。医師の「さわる」が能動的であるのに対して、この「さわる」は完全に受動的な触覚です。どちらも一方向的ですが、医師のそれとはベクトルが違います。

この受動的な「さわる」が求められるのは、たとえば死に向かう体と関わるときです。福岡の特別養護老人ホーム「よりあいの森」施設長をつとめる村瀬孝生は、お年寄りを看取るとき、いかにその体に「さわる」ことが重要であるか語っています。

村瀬は意識的に「さわる」と「ふれる」を区別して定義しているわけではありません。しかし、その著作を読むと、一貫して「さわる」という言葉が使われていることに、強い印象を受けます。

八重子さんは僕たちに身体をゆだね、僕たちは八重子さんの身体をさわり続ける。そうやって、ときを重ねてきた。もうそれも終わるのだ。あの身体はやがて灰となり土に還る^{かえ}。もう二度とさわることもないと思うと、八重子さんの身体が尊さと畏怖を帯びてくる。みなが争って八重子さんの介護をしたがる。あの身体をさわろうとするのだ。

村瀬が指摘するように、私たちの社会において、体が死にたいように死ぬことはほとんど不可能な願いになっています。まわりにいる家族や親戚の迷惑や、医療の高度化によって、延命治療をするにせよ、しないにせよ、人間的な選択の結果として「死」というイベントが起こるからです。

村瀬の「さわる」は、^Bこうした管理の外側にある「生き物としての死」を感じ取るための技法です。死が近づくと、一日は二四時間ではなくなる、と村瀬は言います。たとえば、先の引用にあった八重子さんは、しだいに食が細くなり、排尿の間隔も長くなり、よく眠るようになって、一日は四八時間にまで長くなっていました。

死は、こうした緩慢さの先にあります。その体はいつ逝こうとしているのか。本人が決めたそのタイミングを聞き取るために必要なのは、生者の願望や都合が入り込む双方向的な「ふれる」^Cではありません。求められるのは、体の生理的な声を^{たんか}虚心坦懐に受け取る「さわる」です。「さわる」で向き合うとき、体はその「有限性」を教えてくれる、と村瀬は言います。

老衰死とは病死でも事故死でもない。その死に立ち会う家族に求められる態度というものがあるように思える。その態度を養うには、閉じてゆく父親、母親、おじいちゃん、おばあちゃんの身体に触り続けることが必要であるように感じている。身体の有限性を触ることで知るのである。

さわりつづけることで、自然としての体の摂理が迎える終わりを知る。深い示唆に満ちたことばです。^{注一}ヘルダーは、触覚

がとらえるのは「声高に語る自然のことば」であると語っていました。そのことばは、自らの終わりについても語ることばであるでしょう。

それは本来、私たち人間がどうできる領域の外部にあることばです。村瀬は言います。「そもそも老衰死は自由意志による選択、自己決定、自己責任、契約、賠償、情報公開、外部評価といった領域に存在していない。その枠外でおこなわれた労働から共同性が生まれるように思う」。

ここには、人間の手には負えない「絶対的な遠さ」を前提にした触覚、受け身でしかありえない、交感を拒絶する「さわる」の極致があります。医師の「さわる」は専門的な知識にもとづく一方の支配的な距離を作り出しましたが、村瀬が語るのは「尊さ」や「畏怖」としての距離を含み込んだ「さわる」です。

体が生き物であり、触覚がこの生命に関わるものであるかぎり、すべてを「ふれる」の人間の次元に還元することはできません。「ふれる」の外部には、人間の手には負えないものを「さわる」触覚があります。

このように考えていくと、「さわる」と「ふれる」の区別は、見た目ほど単純ではないことに気づかされます。イ^E、大局的にみれば、私たちの接触的なコミュニケーションは、医師などのように特定の専門的な知識を背景としないかぎり、一方的に伝達する「さわる」ではなく、双方向に生成していく「ふれる」を目指すべきだ、ということになります。

ウ、「ふれる」を突き詰めていくと、その果てには「さわる」が、つまり「ふれあう」ことなど不可能な存在として相手が立ち現れてくる次元がある。誠実であろうとすればするほど、他者に対する態度は非人間的な「さわる」に接近していきます。

哲学者の鷲田清一は、人の声を聞くことが持つ触覚的な側面について論じながら、「ふれる」のなかに、実は「さわる」が含まれていることを指摘しています。相手にふれながら、そこにある「異質さ」にさわってもいる。「ふれる」には、坂^{注一}

部が言うような「自分と他者の境界の溶解」あるいは「相互嵌入^{かん}」で片付けるべきではないような部分があるのではないかと、と鷺田は言います。

その変調、そのきめの微かな変化に、「ふれる」こととしての「さわる」もあるのである。そして、自―他の溶解としての「ふれあい」よりもむしろ、このような異質さそのものに「ふれる」こととしての「さわる」こと、つまり距離を置いたままの接触のなかにこそ、より深い自―他の交感が訪れることがあるのである。

距離を置いたままの接触としての「さわる」。「ふれる」の中に生じるこの距離にこそ、自―他が溶解する「ふれあい」よりも深い他者との関わりがあるのではないかと、と鷺田は言います。村瀬の言葉を借りるならば、「尊さと畏怖」こそが可能にするような「ふれる」があるのではないか。このように考えていくと、「ふれる」と「さわる」は単純に対立するものではなく、入れ子構造のような関係をなしていることがわかります。

私たちの体はしよせん物質であり、自然であり、時間的に変化していくものです。相手との触覚的なコミュニケーションが、その根底に、非人間的な、つまり倫理を超えた自然の次元を含んでいるということ。手の倫理は、この次元に対する「尊さと畏怖」を含んだものでなくてはなりません。

(伊藤 亜紗 『手の倫理』一部変更)

注一 ヨハン・ゴットフリート・ヘルダー……(一七四四〜一八〇三)ドイツの哲学者。十八世紀後半に言語論や歴史哲学の著作を書いた。

注二 坂部恵……(一九三六〜二〇〇九)日本の哲学者。エマニュエル・カントの読解で業績を残した。

問一 空欄 に入る語句の組み合わせとして最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選

び、その記号を解答欄 にマークせよ。

- ① ア 確かに イ さらに ウ だから
- ② ア だから イ けれども ウ 確かに
- ③ ア さらに イ しかし ウ だから
- ④ ア しかし イ 確かに ウ けれども

問一 傍線部 A に「科学の対象として患者の身体を扱う」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なもの

を次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄 にマークせよ。

- ① たとえ患者がどれほど苦痛を訴えていても、それに共感する姿勢は医師に不必要であるということ
- ② 医師には医学の発展に資する義務があるので、必要ならば患者を治験の対象としてもよいということ
- ③ 医学的な知識を根拠として怪我や病気の患部を治療するために、患者の身体に向き合うということ
- ④ 予断を持たず診断を下すためには、患者の声ではなく患者の身体にのみ耳を傾ければよいということ

問三 傍線部Bに「こうした管理の外側にある『生き物としての死』を感じ取る」とあるが、それはどういふことか。その

説明として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄 17 にマークせよ。

17

- ① 人間の自由意志で操作したり介入したりすることのできない神聖な領域の存在を目の当たりにすること
- ② 医学がどれほど進歩しようとも、治したり救ったりすることのできない病気の恐ろしさを理解すること
- ③ 老衰が進行して意識がいまいになれば、本人による主体的な意思決定は不可能であると確認すること
- ④ 医師と患者のような関係性においてではなく、友人同士のような私的な関係性において死を看取ること

問四 傍線部Cに「求められるのは、体の生理的な声を虚心坦懐に受け取る『さわる』です」とあるが、それはなぜか。その

理由として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄 18 にマークせよ。

18

- ① 人間は死が近づくとき意識がもうろうとしてしまうので、「ふれる」ことで当人の意思や体の状態を確かめることができず、結果的に身体に「さわる」ことで身体の状態を直接調べる他はないから。
- ② 老衰死のタイミングを見極めることができるのは、家族や親戚など親しい間柄でのみ有効な「ふれる」というコミュニケーションではなく、専門的知識を持つ医師の「さわる」という姿勢だから。
- ③ 可能な限り長生きしてもらうには、家族が双方向的な「ふれる」姿勢で医師とやりとりし、先入観を排した医師が「さわる」ことによって、延命治療に必要な身体の情報を集めることができるから。
- ④ 「ふれる」は家族や介護する者の意向が介在してしまうが、死のタイミングを知るために必要なのは自然としての体の行く末をありのままに受け入れることができる「さわる」という態度だから。

問五 傍線部Dに「受け身でしかありえない」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄 19 にマークせよ。

- 19
- ① 医学的な知識をもとに優位に立つのは医師なので、患者はつねに医師の診断を受け入れるほかないから。
 - ② 老衰死のように人為を超越した自然的な出来事は、人間の働きかけにより操作することはできないから。
 - ③ たとえ家族でも別々の人間であり、双方向のコミュニケーションで感情を共有することはできないから。
 - ④ 治療不可能な病にかかり余命宣告を受けた人は、人生の目標を諦めて肅々と余生を過ごすしかないから。

問六 傍線部Eに「大局的」とあるが、これと同様の意味を持つ言葉として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄 20 にマークせよ。

- 20
- ① 俯瞰ふかん的
 - ② 理想的
 - ③ 局所的
 - ④ 根源的

問七 傍線部Fに「『ふれる』の中に生じるこの距離」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なもの

を次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄 21 にマークせよ。

21

- ① お互いに相手に対し過度な気遣いをして遠慮がちに接することで生じる、照れや気恥ずかしさ
- ② 他者をまらること理解しようと真摯に努めた結果として認識することのできる、理解しえない外部
- ③ 相手が自分を想う気持ちと、自分が相手を想う気持ちの大きさの違いからくる、思わぬすれ違い
- ④ 対等な立場でコミュニケーションをしようとしても不可避的に入り込む、社会的な地位や評価

問八 筆者の主張について説明した次の文章を完成させるよう、各欄に入る最も適切な選択肢を一つずつ選び、その記号を

解答欄 から にマークせよ。

接触的なコミュニケーションのあるべき姿は、 的な ではなく、 的な がのぞましいとされる。しかし、 という態度を徹底したときに現れる に覚える尊さと畏怖が、より深い結びつきをもたらすことがある。

- | | | | | |
|---------------------------------|---------------------------------|---------------------------------|---------------------------------|---------------------------------|
| <input type="text" value="26"/> | <input type="text" value="25"/> | <input type="text" value="24"/> | <input type="text" value="23"/> | <input type="text" value="22"/> |
| ⑨ 家族 | ⑧ ふれる | ⑦ 有限性 | ⑥ 生者の願望 | ⑤ 双方向 |
| | | | ④ さわる | ③ 他者 |
| | | | ② 一方向 | ① 自―他の溶解 |

MEMO
